



滞日外国人留学生の家族を支えるボランティアの活動動機 : PAC分析による一考察

渡部, 留美

(Citation)

研究論叢, 17:1-8

(Issue Date)

2010-12

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81008659>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81008659>



滞日外国人留学生の家族を支えるボランティアの活動動機

—PAC 分析による一考察—

渡部留美 (名古屋大学国際交流協力推進本部)

1. はじめに

2009年5月現在、日本に滞在する外国人留学生数は、132,720人となっており、2020年までにその数を30万人にまで増加させるという日本政府の「30万人計画」に基づき、各大学では留学生受入れ体制の整備を進めている。

日本に滞在する留学生は、出身国、留学目的(学位取得目的、単位取得目的、語学・文化習得など)、身分(国費留学生か私費留学生か)、性別、専攻分野など多様である。留学生のなかには既婚者も少なからず存在し、家族を母国に残し単身で日本に滞在している者、家族を伴って来日する者など様々である。外国人留学生の帯同する家族(配偶者や子供)については、これまでいくつか研究がなされており、日本語学習の機会、日本社会への適応、出産・育児、子供の教育、配偶者のキャリア喪失などの問題を抱えていることが指摘されている(白土1993、大橋1997、渡部2008など)。このような家族の問題については近年、留学生に関わる問題の一つとして考えられる傾向がある(横田・白土2004)。留学生受入れ30万人計画のなかでも家族を含めた支援の重要性が提言されていることから(注1)、家族に対する支援はもはやホスト側の範疇外であるとは言い切れない状況にある。

留学生を多く受け入れている大学機関などの現場では、早くから家族の存在および問題を認知し対策をとってきた。学内留学生センター、国際センターなどにおいて、日本語教室の実施を中心に支援の報告が複数なされている(北澤1996、田北2004など)。しかしながら、留学生

の家族に対する直接的なサポートは、大学の直接的な経費や人員で賄うことが容易ではなく、リソースの多くを地域ボランティアに頼ってきた現実がある。

留学生の家族に対するケア、サポートの必要性と実態について渡部(2009)は、留学生家族を対象としたボランティア団体(ここではKとする)の活動事例を取り上げ、団体の設立過程、提供するプログラム内容、団体の運営方針、団体が留学生、地域社会、大学に与える影響・貢献について紹介している。さらに、その団体の抱える課題を運営面、組織面から捉え、ボランティア団体というインフォーマル組織と大学というフォーマル組織の関係性の困難さ、重要性について述べた。

本稿では、上述したボランティア団体に所属するボランティア個人々々に対して行った調査をもとに、ボランティア個人がもつ活動動機や活動に対する思いについて明らかにすることを目的とする。

2. 方法

2. 1. 研究に用いた手法

本研究で用いる研究方法は、PAC分析実施法(以下PACと略記)である。PACとはPersonal Attitude Construct(個人別態度構造)の略である。内藤(1993、2002)により開発された技法で、「当該テーマに関する自由連想、連想項目間の類似度評定、距離行列によるクラスター分析、被験者によるクラスター構造のイメージや解釈の報告、実験者による総合的解釈を通じて、個人ごとに態度やイメージの構造を分析す

る方法」である。実際の手続きを詳述すると次のようになる。

- 1) 調査者から調査協力者に連想刺激文(○
○についてのイメージ等)が提示される。
- 2) 調査協力者が刺激文から思いつく単語や
文章を一つにつき一枚のカードに書く(い
くつでも)。
- 3) 調査協力者がカードを重要な順に並べる。
- 4) 調査者がカードをランダムに2枚ずつ選
び、調査協力者に二つのイメージの近さを
直感的に7段階(非常に近い(1)~非常に
遠い(7))で評価してもらう。
- 5) 4)で得られた距離行列に基づきクラ
スター分析(ウォード法)を行い、デンドロ
グラム(樹形図)を出力する。
- 6) 調査者がデンドログラムに基づいたイン
タビューを調査協力者に対し行い、各クラ
スターや各項目についての解釈や背景に
ついて説明を受ける。
- 7) 調査協力者にクラスターごとに名前をつ
けてもらい、各項目のイメージを直感的に
プラス(+)、マイナス(-)、どちらとも
いえない(0)で答えてもらう。
- 8) 調査者による全体的な解釈を行う。

2. 2. 調査協力者

調査協力者(以下協力者と略記)は、上述したように、留学生及び研究者の家族を支援する目的で1996年に設立されたボランティア団体Kのボランティアスタッフ(ここではスタッフと呼ぶ)2名である。Kは、某大学の教員の個人研究室に事務局が置かれており、周辺地域も含んだ大学の留学生・外国人研究者の家族を支援の対象としている。スタッフは設立時8名であったが、2000年前後あたりから20名程度で定着しており、スタッフの入れ替わりは少ない。つまり、一度入会し長く続ける者と、プログラムに数回参加した後、辞めていく者に大別される。数年前に入会した男性1名以外は全て女性

スタッフであり、年齢は50~60代が大半を占めている。スタッフのうち約半数が、国際交流関係の職の経験者あるいは配偶者が大学教員である。活動内容は、留学生家族への直接的な支援・交流プログラム(日本語講座、日本文化交流、依頼を受けて行う病院や学校への付き添い・通訳などのサポート、バス旅行など)の実施と間接的な活動(関係諸機関が開催するイベントへの参加、関係諸機関への留学生家族の紹介、スタッフ研修会、ミーティングなど)に分けられる。運営資金は会員の会費、助成金、寄付金で賄われているほか、関係機関から活動に対する交通費が支給されるケースもある。活動ごとに担当が決められており、担当となったスタッフは、プログラムの立案、運営などを他のスタッフの意見を取り入れながら行う。筆者は2000年からKに入会し、スタッフとして関わっている。今回調査協力者となった2名(TさんとUさん)は、それぞれ、日本語講座と「カフェ」とよばれる交流プログラムの担当者である。筆者のほうから直接本人に調査の申し入れを行い、趣旨説明と調査方法の説明を行ったうえで協力の承諾を得た。

2. 3. 調査時期

調査時期は、2008年7月である。

2. 4. 手続き

上述した従来の手続き方法であれば、一回につき1~2時間要し(内藤2002)、調査協力者には過度の心理的、体力的負担がかかると考えられる。今回は、これらの問題を少しでも解決するために開発された土田のPAC分析支援ツール(PAC-assist)を利用した(注2)。このツールを使用すれば、2. 1. で説明した1)~4)の手順をパソコン上で行うことができる。特に4)の作業では、カードがランダムに自動的に提示されるため、時間の短縮、カードの組み合わせの正確性にも繋がることからPAC-assistを利用した。

手続きとして、はじめに調査協力者に対して以下のような刺激文を提示した。

「Kの活動のなかで、留学生家族を支援することとはあなたにとってどのような意味を持ちますか？これまでを振り返ってみたり、今思いつくこと、イメージなどを書き出してください。単語でも文章でも結構です」

デンドログラムを用いたインタビューでは、調査協力者本人の了解を得てICレコーダに録音し書き起こしを行った。

3. 結果と考察

以下、2名のクラスター分析の結果を提示し、本人の語りに基づき考察を行う。

3. 1. 協力者 T さんの事例

Tさんは、プロの日本語教師であり、Kでは日本語講座及びホームページを担当している。Kにおける経験は約6年である。分析結果を図1に示す。

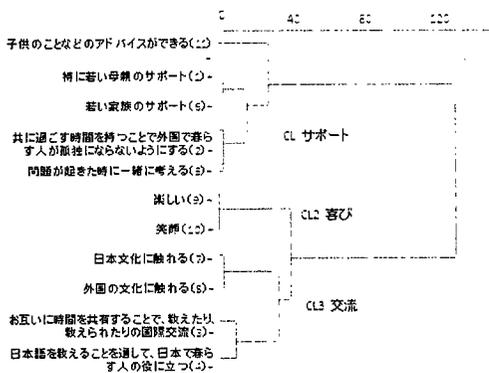


図1 協力者 T さんのデンドログラム

3. 1. 1. 協力者 T さんのクラスター

クラスターは3つであった。クラスター1には、「子供のことなどのアドバイスができる」「特に若い母親のサポート」「若い家族のサポート」「共に過ごす時間を持つことで外国で暮らす人が孤独にならないようにする」「問題が

起きた時に一緒に考える」が含まれ、「サポート」と命名した。クラスター2には、「楽しい」「笑顔」が含まれ、「喜び」と命名した。クラスター3には、「日本文化に触れる」「外国の文化に触れる」「お互いに時間を共有することで、教えたり、教えられたりの国際交流」「日本語を教えることを通して、日本で暮らす人の役に立つ」の項目が含まれ、「交流」と命名した。10項目全てがプラスイメージであった。

3. 1. 2. クラスター1：サポート

クラスター1には、Kの活動の柱であるサポートに関する項目が含まれた。Tさんは自身の子育ての経験や夫の海外勤務に付き添い家族で滞在した経験を踏まえて次のように語った。

自分自身の体験ですが、子供をもったばかりの若いお母さんがたくさんみえますけれども。やっぱりこう、生活が一変したりとか、子供にとっても時間をとられたり力を取られたり。大変消耗するっていう実感ですね、私も感じましたので。そういう方たちの役に立てればなと思っています。

また発生する種々の問題については、「その人が持つ問題っていうのは様々だと思うんですね。そういうときに一緒に考えて、どうしたらいいかって考える。それがサポートの原点かな」と述べ、「一緒にすることによって、楽しい時間があれば孤独感も減ると思うし、出て行く場所があれば孤立することもないのではないかな」と、サポートが問題の解決だけでなく、問題発生予防にもなっていると考えていることが理解できる。

3. 1. 3. クラスター2：喜び

「喜び」と命名されたクラスター2には、「活動に参加する外国人も、私たちもお互いに楽しい時間を共有している」イメージが含まれている。それは、活動を通してスタッフと家族が得

られるような「お料理を一緒に作ったりとか（中略）、同じことを一緒にやっているっていうこと自体が、なんか楽しいことだと思う」ことの他に、間接的に浮かびあがるものもある。ホームページを担当しているTさんは、「ホームページに活動の報告と写真をたくさん載せていますが、そのときの写真に写る皆さんの顔がみんな笑顔なんです」と語った。参加者が共有する楽しさや写真に表れている笑顔が、喜びという思いに繋がっていると捉えることができる。

3. 1. 4. クラスタ3：交流

Tさんは、参加者との交流を通して、外国の文化に触れるだけでなく同時に日本文化にも触れることができるとし、「自分自身の文化を見直すきっかけになる」と語っている。また、日本語講座の担当者でもあることから、日本語によるコミュニケーションについて次のように語った。

ゼロで来た人たちが少しずつ話せるようになって、日本語で交流ができるようになって、それを喜んでいらっしゃるし、またそれで日本人も喜ぶますよね、「英語使わなくて済む〜」って。そういうことで役に立っているなという実感があります。

自分の専門である日本語教育をボランティア活動に活かすことにより、家族の日本語能力の向上だけでなく、他のスタッフが家族とコミュニケーションがスムーズに図れるようになる過程をみることにより、Kに貢献していると感じている。

3. 1. 5. Tさんの総合的考察

Tさんは、自らの海外滞在経験、母親としての経験をもとに留学生家族が抱える問題を理解していた。彼らと交流するなかで、時間や悩みを共有することで一緒に問題を考えながら

解決し、支援につなげたいという気持ちが表れていると読み取れる。また自分の専門分野である日本語教師としての経験を活かし、日本語講座を担当することで、留学生家族の日本語能力向上だけでなく、周りの日本人やKのスタッフが家族と日本語で交流できるようになることでKに貢献していると実感していることが理解できる。

3. 2. 協力者Uさんの事例

Uさんは、元小学校の教員であり、カフェを担当している。Kにおける経験は約7年である。分析結果を図2に示す。

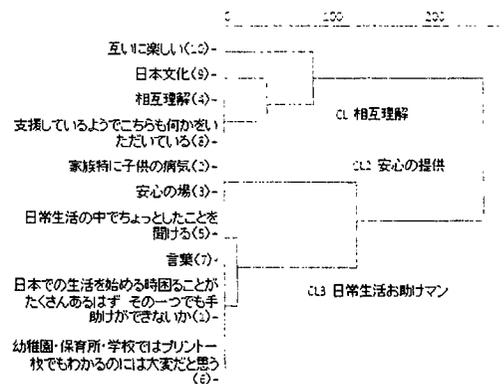


図2 協力者Uさんのデンドログラム

3. 2. 1. 協力者Uさんのクラスター

クラスター1には、「互いに楽しい」「日本文化」「相互理解」「支援しているようでこちらも何かをいただいている」が含まれ、「相互理解」と命名した。クラスター2には、「家族特に子供の病気」「安心の場」が含まれ、「安心の提供」と命名した。クラスター3には、「日常生活の中でちょっとしたことを聞ける」「言葉」「日本での生活を始める時困ることがたくさんあるはず その一つでも手助けができないか」「幼稚園・保育所・学校ではプリント一枚でもわかるのには大変だと思う」が含まれ、「日常生活お助けマン」と命名した。プラスイメージは9項目、マイナスイメージは1項目、どちらもも

いえないイメージはなかった。

3. 2. 2. クラスタ1 : 相互理解

Uさんは、月に数度、1~2時間ほどしか留学生家族と会わないが、日本文化を教えたり、外国の話の聞いたりして楽しい時間を過ごしながら相互理解を深めることができていると語った。留学生家族のほとんどは、一定期間滞在したのち日本を離れるが、「プログラムの内容をその時のお土産にしてもらったらいい」と考えている。また、「何かしてあげましたっていう感情なんて持ってしているわけではない」という心構えで留学生家族に接しているため、彼らが数年後国に帰るときには、「外国のお友達という感情」が湧くのだと言っている。

3. 2. 3. クラスタ2 : 安心の提供

Tさんと同じく、Uさんも子供を持った家族の支援が重要であると考えている。Uさんは単身留学生や配偶者帯同留学生といった子供のいない留学生のグループと子供のいる家族帯同留学生のグループの違いを次のように述べ、Kの活動の重要性を述べている。

大人やシングルであれば自分の仲間や友達にパッと聞いて教えあうことができるけれども、子供の場合っていうのは、とても難しいと思います。突発的であったり、訳も分からなく泣いたり。それでこんな小児科がありますよって適切に教えてやったり、連れて行って一緒にサポートしてやったりということが支援の中であつたら、家族というのは外国で暮らす中でどんなに安心の材料になるだろうか。

このように考えるようになったきっかけは、Uさん自身がある留学生家族 (Mさん) の支援を直接した経験であるという。

Mさんをイメージしたんですけれども、あ

の方たちは、学生たちがたくさん住む地域からポーンと離れたところに移り住んできたでしょう。それで最初に、小児科がどこがいいのかなと、お電話があつたのだと思います。それで私2件ほどしか知らなかつたので、自分の子供がかかつたところがまだあつたので、「いいですよ、あそこもありますよ」と場所も教えたんですけども。日本にきて数か月ほどだったんですけど、私はそれでいいと思った、終わりだと思つたんですけど、「一緒に来て下さい」といわれました。そして行つたら、お医者様とか英語とか分からないし、手続きが分からなかつたり。いっぱい分からないことがありました。こんなときって他の人たちがきつと困っているんだなって思つたので。

但し、毎回付き添うのではなく、彼らが自立できるように最初だけ手助けをすることが重要で、このような方法が、留学生家族に安心を提供しているのだと体験上体得したようである。

最初付き添う、1回か2回、サポートをしましたけれども、あとは、慣れてこられるから、もう大丈夫ですって、自分たちで行かれていますから、安心をお父さんとお母さんに与える、っていうのが大切だなあって思いました。

3. 2. 4. クラスタ3 : 日常生活お助けマン

留学生の家族は日常生活の些細なことでも言葉の問題や文化の違いのために、自分たちで解決できないことがある。Uさんはそういったことを少しでも手伝えることができれば、と考えている。

日本で生活していく限りは、学校からもらってくるプリント一枚でも、準備物とかお

知らせとか、母親だったらそれを分かって用意してあげたい。でも、言葉が分からない、漢字が分からない、そんなときに、「どういうことでしょうか、ちょっと見てください。これは何ですか」って聞けるようなメンバーなりがいるっていうことが、日本という外国で暮らすなかで大切な安心の場を与えられないかなって日ごろ思っています。

ところが、それを家族のほうから質問してきいたり、相談してきいたりすれば分かりやすいのだが、家族のほうでもあまり親しくないかと遠慮して依頼してこないことがあるという。従って、プログラムに参加していても彼らの必要性が見えないという。「本当に必要としていたときに私たちが提供できたらそれが一番」と考え、Kの永遠の課題であるとしている。また、唯一のマイナスイメージであった「言葉」については、病院に付き添ったときなど、英語でうまく説明できないこともあり、言葉の壁がなければ気持ちよくサポートできるだろうと述べたが、それについては「心でカバーしていると思います(笑)」と語った。

3. 2. 5. Uさんの総合的考察

Uさんは、留学生家族と日本文化や外国文化を紹介しあう交流のなかで彼らに対し、「してあげる」という感情ではなく「外国のお友達」という付き合いを心がけていることが理解できる。また、同時に、日本文化や日本の習慣、日本語に慣れていない「外国のお友達」に対し、日常生活の些細な出来事についても手伝えることがあると感じ、留学生家族が早く自立できるよう手助けをする、というスタンスを持っている。実際に病院や学校などの地域で生活する上で必要な情報を提供し、喜ばれたという経験から、それが有効であることを実感している。特に学校で配布されるプリント類を理解することの難しさや学校行事への保護者の役割の

重要性などは、Uさんが元学校教員であったからこそ理解でき、サポートできることであると考えられる。

4. 総合的考察

以上、2名の分析結果をみてきたが、いくつかの特徴的な点について総合的に考察を行う。

4. 1. 活動に対する楽しさの実感

2名とも活動することの楽しさを挙げており、笑顔で参加する家族を見て自分も楽しくなったり、参加者との交流の楽しさも活動に参加する原動力となっているようであった。Tさんは、国は違っているけれども、一緒に笑いあえたり、何気ない会話のなかで、互いのおもしろいことを見つけて笑ったりすることが楽しいと述べ、Uさんは外国に行っているわけではないのに、外国の話の聞いたり、食事をもらったりすることで、「仮想体験」ができることが楽しいとしている。Uさんは留学生家族を「友達」と表現しており、参加者とスタッフを、支援する・される関係ではなく対等な関係として捉えていることがわかる。Kのプログラムは、一緒に料理を作ったり、配偶者に国の紹介をしてもらったり、共に何かをするというものが中心となっており、そのような活動を通して、「参加して下さっている方たちの何気ない行動から色々なことを教えられている」(Tさん)、「何かしてあげました、という感情なんて持っていないわけではない」(Uさん)、という謙虚な気持ちが芽生えるのではないかと考えられる。

Tさんは、Kの活動について、「マイナスだと思ふことと、プラスだと思ふことを比べるとやはり自分自身はプラスだと思ふことがたくさんあるから活動に参加しているんだと改めて思いました」と振り返っており、ボランティアのなかには楽しさがあることが活動参加の意欲となっていることが示唆される。

4. 2. 留学生家族への思い、サポート

留学生家族への思いについて共通していたものは、子供を持った家族に対するサポートであった。Tさんは、小さい子供を持つ家族について特に心配しており、自国にいれば、自分の母親などの手伝いを受けることができるが、日本では大変であろうと自分の経験から考えており、サポートに活かしていきたいと考えている。Uさんは、子供が病気になったときなど緊急事態の時にサポートすることが必要であり、しかしそれは最初だけで、次第に自立し、自分たちでやっていけるように手助けすることが肝心であると述べている。また、言葉の面については、留学生の家族の大半は日本に来てから日本語を学習するが、簡単な会話ができるようになって、漢字で書かれたものや学校で配布されるプリントの内容が文化的な差から理解が困難な時がある。元小学校教員であった経験から、配布されるプリントの重要性を認識しており、忙しい先生に代わって、自分たちが説明してあげることが可能であるし、それがKの支援活動のなかで留学生家族の「心の支え」になることがベストであると考えている。このように、それぞれの経験をもとに家族に対するサポートを考えていることが理解できる。

4. 3. プロとボランティア

最後にTさんとUさんのなかにあるボランティア性とプロ性について考えてみたい。

田尾 (1999) は、ボランティアの適性として「対人関係の技術や感受性、オープンマインド」「他人を受け入れるキャパシティ、異質な考え方に対応できる柔軟性」「自己中心でないこと」(p. 55) を挙げており、ボランティアには適性が必要であると述べている。更に、「ボランティアは単なる素人の活動ではない。(中略) ボランティア活動が対人的な活動であればあるほど、単なるアマチュアでは済まされないうところも多く出てくる (p. 56-57)」と述べ、対人的なボランティアであればあるほど、プロ性

が重要になってくると語っている。

また、中本 (2007) は、医療現場における外国人のための通訳サポートを行うボランティア団体について、ボランティアが医療通訳を行うことへの批判があるなかで、ボランティアであるからこそ成立する支援があると主張している。それは、例えば、単に言葉を通訳するだけでなく、それ以外の場面において、母語で様々な話を聞くことによって患者の体調が良くなったり元気になることがあるという。

つまり、対人的なボランティア活動にはプロフェッショナルな能力がときとして必要とされるが、プロ性が強いボランティア活動のなかにもボランティアでなければ可能とならない支援が存在するのである。ボランティア活動においては、プロ性とボランティア性の均衡が重要となってくると考えられる。

TさんとUさんの場合は、どうであろうか。TさんとUさんは、それぞれ日本語教員、元小学校教員であり、各経験を活かしたサポートを意識的に行っていることが感じられた。と同時に、Tさんの「色々なことを教えられている」、Uさんの「何かしてあげました、という感情なんて持ってしているわけではない」という謙虚な姿勢からは、プロ意識を持ちながらもKでの自分はあくまでもボランティアであるという意識がより強く働いているものと捉えることができる。

ある時はプロの顔をのぞかせ、しかし全体としてはボランティアであるというスタンスをもつTさんとUさんは、プロであればきっと出来ない、あるいはボランティアであれば見逃されるかもしれない隙間の部分をすくい上げる役割を果たしているものと考えられる。

5. おわりに

以上、2名の留学生家族支援団体のボランティアに対して行ったPAC分析の結果から、ボランティアへの活動動機と留学生家族支援活動を通して持つ思いを明らかにした。PAC分析は、

個々に内在する思いを探るという手法であり、今回の調査によって目的を達成することができたと考える。団体としての活動理念や活動内容とは別に、ボランティア個人の考えや思いを明らかにすることにより、サポートを受ける側へよりよいサービスを提供できるようにすることはもちろん、ボランティア団体としての組織力の強化や発展に繋がるのではないかと考える。今後はデータ数を増やし、個々のボランティア活動に対する思いを検証していく必要があると考える。

注：

- 1) 「『留学生30万人計画』の骨子」とりまとめた考え方に基づく具体的な方策の検討(とりまとめ)平成20年7月8日中央教育審議会大学分科会 留学生特別委員会
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/1249702.htm
- 2) 土田先生からツールソフトをお送りいただき使用した。

参考文献：

- 北澤勝親 (1996) 「外国人留学生とその家族・友人のための日本語教育の実践」、『信州大学教育学部附属教育実践研究指導センター紀要』、No. 4、pp. 119-128
- 内藤哲雄 (1993) 「個人別態度構造の分析について」『人文科学論集』、27、pp. 43-69
- 内藤哲雄 (2002) 『PAC 分析実施法入門[改訂版]：個を科学する新技法への招待』、ナカニシヤ出版
- 中本剛二 (2007) 「外国人医療サポートボランティアの位相と困難、可能性—『みのお外国人医療サポートネット』への参加から考える—」『大阪大学日本学報』26、pp. 97-111
- 大橋敏子 (1997) 「外国人留学生の家族に関する調査」『異文化間教育』11、pp. 156-164
- 白土悟 (1993) 「留学生家族の受け入れ体制の構築について(1)」『九州大学留学生センター紀要』5、pp. 197-211

- 田北光子 (2004) 「長崎大学留学生家族に対する支援活動—この11年の歩み—」、『長崎大学留学生センター紀要』、第12号、pp. 59-69
- 田尾雅夫 (1999) 『ボランティア組織の経営管理』有斐閣
- 横田雅弘・白土悟 (2004) 『留学生アドバイジング 学習・生活・心理をいかに支援するか』ナカニシヤ出版
- 渡部留美 (2008) 「滞日外国人留学生の帯同配偶者の現状—配偶者へのインタビュー・アンケート調査から—」『留学生交流・指導研究』国立大学留学生指導研究協議会、11号、pp. 133-143
- 渡部留美 (2009) 「滞日外国人留学生の家族の支援—ボランティア団体「KOKORO-NET in 神戸」の活動事例—」『研究論叢』第16号、pp. 35-43